

「求めなさい」

マタイによる福音書 7:7-14

今、東京では、オリンピックに続いてパラリンピックが開催されています。このコロナ禍で緊急事態宣言が出されている中、このような感染を拡大するような催しに、私は賛成ではありませんが、それぞれのアスリートたちが、さまざまな障がい乗り越えて、自分たちの持っている力と技を発揮して、泳いだり走ったり、さまざまな競技に打ち込んでいる姿は、見ている私たちに感動を与え、励まされる思いがいたします。

イエスさまは、今日の聖書の箇所、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」と言われました。「求め」、「探し」、「門をたたく」ということは、どんなときにもあきらめず、目標を目指して励み、努力し続けることを意味しているように思います。

人間が生きて行くためには、そのような、「求める」という意欲、「探す」という気力、「門をたたく」という努力が必要であるように思います。「生きがい」とか「生きる喜び」は、そういう「チャレンジ」から生まれるのではないのでしょうか。

人生には、重い病や思わぬ事故、様々な行き詰まりや挫折がありますが、「もうだめだ」とあきらめ、気力を失ってしまったら、治る病も治らず、乗り越えられる障害も乗り越えられず、失意のうちに終わってしまいます。このイエスさまの「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」という言葉は、まず、そのような意欲や気力を私たちに促す言葉として受け止めることができるように思います。

一時期、「三無主義」という言葉がはやったことがありました。日本の国の高度経済成長が終わり、バブルがはじけたとき、若者をはじめ、多くの人々が、「無関心・無責任・無気力」というような状態に陥りましたが、そのような状況は、今も変わっていないような気がします。むしろ、社会的な問題に対する人々の関心、平和に対する意識、選挙など見られる政治に関する意識など、ますます「無関心・無責任・無気力」な状態になっているのではないかと、このように思います。これは、多分に今の政治の在り方や、経済の仕組みなどとも関係があるものと思います。「求めても得られず」、「探しても見つからず」「門をたたいても開かれない」という希望のない状況が、この「三無主義」を生み出しているからではないか、という気がします。

しかし、イエスさまは言われるのです。「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」と。このみ言葉は、そういう私たちに、大きな励ましと、希望を与える言葉のように思います。

イエスさまを信じる信仰は、どんな状況にあっても、あきらめず、常に求め続け、忍

耐をもって探しつづけ、希望をもって門をたたき続ける、そのような意欲と力を与えます。それは、8節でも語られているように、「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」という、確かな約束が示されているからです。私たちキリスト者にとって、「すべての労苦は、無駄になることはない」(コリント一15:58)のです。

私たちキリスト者にとって、「求め」「探し」「門をたたく」ということは、「祈ること」を意味します。「祈り」は、単に私たちが、心の中で何かを求めるのではなく、また頭の中であれこれと方策を探し求めることはありません。また、いたずらにあちこちの門をたたきまわることでもありません。神さまを信頼し、自分の求めていること、願っていることを、率直に申し上げて、すべてを神さまの御手にお委ねすることです。神さまが「与え、見つけ、門を開いてくださる」ことを信頼して、「求め」「探し」「門をたたく」ことです。それは、決して「あなた任せ」にして、自分は何もしないということではありません。「祈りは労働である」という言葉がありますが、「求め」「探し」「門をたたく」という祈りは、行為や行動、生き方を伴うことなのです。

そのような祈りは、「聴かれる」のです。イエスさまは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」と言われ、「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」と語られました。祈り聴かれるのです。祈りは独り言ではありません。神さまとの対話です。誰の祈りでも、心からの祈りを、神さまは聴いてくださるのです。だから私たちは、どんなに困難な絶望的な時にも、私たちはあきらめずに、「祈りは聴かれる」という確信をもって、祈り続けることが大切なのです。

よく、「困った時の神頼み」という言葉を聞くことがあります。これは、何か困った時だけ、神仏に依り頼み、後はまったく神も仏も無いような生活をしている姿を冷やかした言葉です。たしかに、困った時だけの都合の良い祈りでは困ります。しかし、困った時に神さまに依り頼み、「祈る」ということは、大事なことだと私は思います。困った時、自分の力ではどうしようもないとき、頼るべき神を知らず、祈ることも出来ないということほど惨めなことはありません。困った時ほど、祈るべきなのです。

フォーサイスという人が「祈りの精神」という本の中でこんなことを言っています。「人生における災いとか不幸、挫折は、人を押しつぶすように見えるが、それは私たちが祈りへと導き、神さまと結びつけるものだ」と。そして、このような譬えを記しています。「二枚の建築材を固着させるとき、接着剤が固まるまで、強く外部から圧力をかけ、固着してその必要が無くなれば圧力を緩める。それと同じように、さまざまな外からの圧迫を通して、私たちは、神さまと固く結ばれるのだ」と。つまり、さまざまな

困難は、私たちが祈りへと導き、私たちの魂を神さまと固く結びつける、というのです。ですから、さまざまな苦難の中でこそ、私たちは熱心に祈り続ける必要がある、というのです。私たちは、長引くコロナ禍の中で、どれだけ神さまに信頼して祈っているのか、反省させられます。この試練の時は、私たちがもっと神さまと固く結ばれるための圧力であり、聖書に親しみ祈る時ではないのか、という気がします。

イエスさまは、9節以下で、次のように述べておられます。「あなたがたのだれが、パンを欲しがると自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがると、蛇を与えるだろうか。このようにあなた方は悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」(9-11)。

ここで注目したいことは、「神さまは良い物をくださるにちがいない」と言われていることです。「パンを欲しがると子供にパンを」、「魚を欲しがると子供に魚を与える」とは言われず、「良い物をくださる」というのです。自動販売機は、お金さえ入れれば、確実に自分の求めたお茶とかジュースとかが出てきます。しかし、祈りはそのような機械的なものではないのです。神さまが私たちの祈りを聴かれる時、すべて私たちの思い通り、願った通りになるとは限らないということです。神さまは、ご自身のみ心に従って、私たちに最も良い物、最も必要と思われるものを与てくださるということです。

例えばこの暑さの中、小さい子どもが冷たいアイスクリームばかり欲しがるとします。こどものことをよく知っている母親は、子どもの言うなりに、アイスクリームばかり与えるとは限りません。冷たい物ばかり食べていたらお腹を壊すことを知っているからです。「もう止めておきなさい」、とか「今度は温かい飲み物にしなさい」とか、その子にとって、今もっともふさわしい物を与えるのです。それが親の愛です。

聖書の中には、自分の祈ったようにならなかった祈りがたくさんあります。パウロは、自分の体のとげ(肉体の病)について、3度も主に祈ったということをコリントの信徒への手紙(二)の中で記しています。その「とげ」とは、極度の眼病とも、発作を伴うてんかんのような病とも言われています。彼にとってその病は、伝道の妨げとなる「サタンを使い」のように思われ、何度も「取り去ってください」と祈り続けたのです。しかしその祈りの中で、主は、「わたしの恵みはあなたに十分である」と語られたのです。パウロの病は治らなかったのです。しかし彼は、その神の言葉を通して、弱さの中に働く神の力を信じ、「わたしは弱い時にこそ強い」と、弱さをバネに、さらに力強い働きをするようになったのです(12:9)。パウロはそのような体験を通して、「神は、神を愛する者たちには、万事が益となるように、共に働いてくださる」(ローマ 8:28)と語ったのです。

「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるに違いない」と主イエスは言われました。この「良い物」という言葉は、ルカによる福音書 11 章の平行記事によると、「聖霊」になっています。「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(13b)と。祈りを通して私たちに与えられる最も良い物は、神の霊、「聖霊」なのです。祈りは私たちと神さまとを結ぶ懸け橋のようなものです。祈ることによって神さまの霊(聖霊)を与えられて、ますます深く神さまの深い御心を示され、神さまとの深い交わりへと導かれるのです。

イエスさまは、このように祈りについて勧められた後、12 節で「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」と言われました。この「人にしてもらいたいことを人にもしなさい」という言葉は、一般に「黄金律」(ゴールデン・ルール)と呼ばれている教えです。ユダヤ教のラビたちの教えやギリシャ・ローマの格言には、これと似た言い方で、「人からされたくないことは、人にするな」という言葉があったそうです。日本でもよく言われます。「人からされて嫌なことは、人にするな」と。しかし、イエスさまは、そういう否定的な言い方ではなく、より積極的に「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」と言われたのです。

この言葉は、一見して、これまでイエスさまが言われたことと、関連がないように見えます。「求めよ」「探せ」「門をたたけ」…と勧めるこの箇所にも、この黄金律はどう関わるのでしょうか。おそらくイエスさまは、「祈り」は、人と神さまとの関係を深めるだけではなく、人と人との関係をも深めるものだ、ということと言わんとしているのではないかと思います。父なる神さまが、私たちの祈りに応えて、もっとも良い物を与えてくださるのであれば、あなたがたも同じように、あなたの隣人に対して、同じようにしなさい。「自分がしてもらいたいと願うことを、あなたも人にしなさい」と勧められるのではないかと、思います。つまり、「祈り」は、自分の願いや求めていることだけを神さまに頼むだけではなく、同時に、他者の苦しみや痛みを思いを馳せ、その他者のために祈り、仕えることでもあるのです。ボンヘッファーという牧師は、「神さまに祈ることと、人々の間で正義を行うこと」は、切り離すことの出来ない、キリスト者の課題である、ということを書いています。私たちは、自分のためだけに「求め」「探し」「門をたたけ」のではなく、他者のためにも執り成し祈りを忘れないようにしたいものだと思います。

この 8 月、特に「平和」について、イエスさまの「山上の説教」から学びましたが、最後に示されたことは、祈りによって、神と人との間に和解と平和を生み出すことの大切さです。これからも、常に、平和を求め、探し、門をたたき続けたいものです。